

控物次平形銭

賦の制禁

堂胡村野

庫文空青

笛の名人春日藤左衛門は、分別盛りの顔を曇らせて、高々と腕を拱きました。

「お師匠、このお願いは無理でせうが、亡くなつた父一色清五郎から、お師匠に預けた禁制の賦、あれを吹けば、人の命に拘はるといふ言ひ傳へのあることも悉く存じて居ります、お師匠の許を離れる、この私への餞別に、たつた一度、此處で聽かして下さるわけには参りませんでせうか」

一色友衛は折入つて兩手を疊に突いて、斯う深々と言ひ進むのです。春日藤兵衛に取つては、朋輩でもあり、競争者でもあつた一色清五郎の忘れ形見、一時は酒と女に身を持ち崩しましたが、近頃はすつかり志を改めて、藝道熱心に精進し、今度は愈々師匠藤左衛門の許を離れて、覺束ない乍らも一家を興さうとしてゐる男でした。取つて二十七、少し虚弱で弱氣ですが、笛の方はなかくの腕前で、もう一人の内弟子の、鳩谷小八郎と、孰れとも言はれないと噂されました。

「一々尤も、お前の言葉に少しの無理もない。が、『禁制の賦』は三代前の一色家の主人、

一色宗六といふ方が、『寝取り』から編んだ世にも怪奇な曲で、あれを作つて間もなく狂死したと言はれる。その後あの曲を奏する毎に、人智の及ばぬ異變があり、お前の父親一色清五郎殿が、嚴重な封をしてこの私に預けたのだ。流儀の奥傳祕事、悉くお前に傳へた上は、あの『禁制の祕曲』も還しても宜いやうなものだが、何んと言つても、まだ三十前の若さでは、萬一の過があつては取返しがつかぬ。決してあの曲を憎むわけではない、せめてあと三年待つがよからうと思ふがどうだ」

春日藤左衛門は道理を盡して、斯う言ふのです。

「よく判りました、お師匠。でも、私のやうな若い者には、笛を吹いて祟があるといふことは受け取れません。それはほんの廻り合せか、吹く人の心構への狂ひから起つた間違ひでございます。それに私は自分の未熟もよく存じて居ります、『禁制の祕曲』をこの私に渡してくれといふやうな、そんな大それた事は申しません。たつた一度で宜しうございます。後學のために、お師匠の許を去るこの私に、一色家に傳はる祕曲を、吹いて聴かして下さればそれで堪能するのでございます」

「――」
藤左衛門は口を緘んで友衛の後の言葉を待ちました。

「禁制の曲に魔がさすと言ふのは、夜分人に隠れて、そつと吹くからでございませう。一日中で一番陽氣の旺さかんな時、例へば正午うまの刻こくと言つた時、四方を開け放ち、皆様を銘々のお部屋に入れ、火の元の用心までも嚴重に見張つて、心靜かに奏そしたなら、鬼神いへじと雖も乗すずる隙すきが無いことせう」

一色友衛は、藝道の執心のために、どんな犠牲でも忍び兼ねない様子でした。

「いかにも尤も、——それほど迄に言ふなら、この祕曲の封を解いて、お前にも聽かせ、この私も心の修業としよう」

春日藤左衛門は到頭折れました。この話の始まつたのは丁度辰刻半いつくはん（九時）それから準備を整へ、正午こ、のつ刻少し前には、妻玉江、娘百合、あやめ、下女お篠、下男作松、内弟子鳩谷小八郎はとやを、それ／＼の部屋へ入れ、主人春日藤左衛門は、一色友衛とたつた二人、奥の稽古部屋に相對して、三十年前友衛の父一色清五郎の封じた、禁制の賦の包を解きました。

中から出たのは、平凡な能のうくわん管ふの賦ふが一冊、それを膝の前に開いて春日藤左衛門は見詰めました。

「よいか」

「はッ」

一色友衛は五六尺下がつて、疊の上に両手を突きます。

虻あぶが一匹、座敷を横切つて庭へ飛去ると、眞夏の日はクワツと照り出して、青葉の反影が、藤左衛門の帷子かたびらや、白い障子を、深海の色に染めるのでした。

高々と籐とうを巻いたぬば玉の能のう管くわん、血のやうな歌口をしめし乍ら、藤左衛門はさつと禁制の賦に眼を走らせます。

一寸見たところでは、何んの變へん哲てつもない、『寢取り』の變ヴァリエーション奏そう曲きょくですが、心靜かに吹き進むと、その旋律せんりつに不思議な不氣味さがあつて、ぞつと背そびらに水を流すやうな心持。藤左衛門は幾度か氣を變へて途中から止さうとしましたが、唇は笛の歌口に膠かうちやく着して、不氣味な調べが劉りゅう唳りやうと高鳴るばかり。

これは併し、いろ／＼の先入心が、強迫觀念になつて、技倆に自信を持ち過ぎる、春日藤左衛門の心おびやを脅かすのでせう。

「――」

吹き了つた笛を、流儀の通り膝の前に置いて、藤左衛門はホツと溜息ためいきを吐きました。暫くは師匠も弟子も、物を言ふことさへ忘れてゐたのです。

「有難うございました」

やゝ暫く經つて、緊張の弛ゆるんだ一色友衛しきどもゑは、丁寧に一禮しました。

その時、――

「わツ、た、大變ツ」

下男の作松の凄まじい聲が、遙かの方から眞晝の部屋々々を筒抜けて響きます。

二

「何うした」

「何が大變だ」

家中の者が、八方から集まりました。作松が怒鳴どなつてゐるのは、中庭に背そむいて、庭木戸に面した、二番目娘あやめの部屋の前、踏ふみ石いしの上に立つたまゝ、縁側へ手を突いて、部屋の中を覗く恰好になつたまゝ、尚ほも氣狂ひ染みた聲を張り上げてゐるのです。

「お嬢さんが、――お嬢さんが」

「娘がどうした」

一番先に驅込んだのは、春日藤左衛門、それに一色友衛が續き、鳩谷小八郎が續きました。

「あツ」

凄まじい恐怖が、花火のやうに炸裂したのも無理はありません。部屋の中に若い娘が一人、首に強靱な麻繩を巻かれ、その繩尻を二間ばかり疊から縁側に引いて、俯向になつたまゝ死んでゐたのです。

「お、あやめツ」

が、引起了した藤左衛門は、一と目、それは妹のあやめで無いことに氣が付きました。

「あ、百合だ」

「お姉さん、まア」

妹のあやめは涙聲になつて、姉の死骸に縫りつきました。

無残な姿になつてゐるのは、少し足が悪い上、ひどい疱瘡で見る影もないきりやうになつた姉娘のお百合、二十四になるまで兩親の側に居て、藝事に精を出してゐる、日蔭の花のやうな娘でした。

十九になる妹のあやめは、姉に比べるとびつくりするほどの綺麗さ、その方は幸に無事

だつたのです。

「まア、どうしたことでせう」

母の玉江は、一番遅れて縁側へ顔を出しました。十九の時あやめを生んで、今年は三七、繼子のお百合よりは、遙かに美しく、若々しくさへ見える内儀振りです。

それから際限もなく混乱が續きました。醫者が来る前に、呼び掛ける者、泣き叫ぶもの、水をかける者、背中を叩くもの、滅茶々な介抱をしましたが、お百合はもう息を吹き返しさうもありません。

町内の御用聞、佐吉が駆け付けたのは、それから又一刻も経つた後のことです。

一と通り様子を聽いて、お百合の死骸を見ると、

「すまねえが、お内儀に番所まで来て貰はうかえ」

錆のある聲が、藤左衛門とその若い女房の玉江を縮み上がらせませす。

「親分、——繼しい仲には違ひないが、この女は、そんな大それたことの出来る女ぢやありませんよ」

藤左衛門は一應女房を庇護しました。

「いや、配偶の言ふことなどは當になるものぢやねえ」

佐吉は少し光澤のよくなつた頭を頑固らしく振ります。

「御新造さんぢやありませんよ、親分さん」

下女のお篠です。二十一歳の純情をぶちまけて、自分達には此上もなく良かった、主人の妻を救ふ氣になつたのでせう。

「お前なんかの口を出す場所ぢやねえ、引込んでゐるがいゝ」

「だつて御新造さんは、上野の午刻の鐘が鳴るズーツと前から、ツイ今しがたまで、私と一緒に勝手に居たんだもの」

「何んだと？——そいつが嘘だつた日にや、手前も牢へ叩き込まれるよ」

「いゝとも、舌を抜かれても驚かないよ」

お篠は一步も退きません。その眞つ正直らしさも、佐吉の疑ひをケシ飛ばしましたが、それよりも縁側にしよんぼり坐つたまゝ、一言も辯解がましい事を言はない玉江の態度が、今まで悪者ばかり見て來た佐吉の眼にも、かなり不思議なものに映つたのでした。

「よし、それぢやお前の顔を立ててやらう、——とところで、その繩を見せてくれ」

佐吉は死骸から外した繩を受取つて、念入りに調べました。

「その尖端が畏になつて居るやうだが——」

鳩谷小八郎はツイ口を出しました。この男は一色友衛より四つ年下の二十三で、武家出の腕も才覺も出来た男、わけても妹娘のあやめと、何かの噂を立てられてゐる、立派な男でもあつたのです。

「成程、こいつは罾だ、——どんな具合に首に掛けてあつたか、ちよいとやつて見てくれ」
「——」

佐吉の頼みに、皆んな顔見合せるばかり、一人も立たうとする者はありません。

「親分さん、——繩の先が罾になつて居ましたよ。投げ罾で獸を捕る時にやる——あの調子で——」

作松は何の作意もなく、そんな事を言ふのです。

「ちよつとそれをやつて見てくれ」

「いやな事だが、やりますよ。大きいお嬢さんの敵を討つためなら、これも仕方があるめえ。南無阿彌、南無——」

作松は念佛を稱へ乍ら、百合の死骸の首に繩を巻いて見せるのでした。

「成程、それなら遠くから投つて、首へ引つ掛けられる、——お前は何處の生れだ」

佐吉は變なことを訊きました。

「信州ですよ、尤も十七の時江戸へ出て、二十五年も奉公してゐるが——」

「すると前厄か」

「へエ——」

「信州に居る時は、ちよく／＼その投げ罫で獸を捕つたんだらう」

「時々はやりましたよ、親分」

「今でも、人間位なら捕れるだらうな」

「と、飛んでもない」

作松は愕然としました。首尾よく佐吉の訊問の罫に掛つたのです。

「まあ宜い、——とところで庭木戸は内から締つてゐるやうだが——」

「此處は滅多に開けません」

一色友衛はしかと言ひ切りました。

「下手人は家の中の者で、たつた一人で居た者となると——」

佐吉の眼は兎もすれば繼母の玉江と、下男の作松の面上に探り寄ります。

「親分、お助けを」

その日の夕刻、下男からの作松は、辛くも春日家を脱け出すと下谷竹町から神田明神下まで一氣に飛んで、錢形平次の家へ轉げ込んだのです。

「あツ、脅おそかすぜ、爺とつさん」

平次はそんな無駄を言ひ乍ら、この闖ちん入者にふしやを迎へました。

「錢形の親分さん、お助け下さい。一生の願ひ、親分を見込んで、命がけで飛んで來ました」

「おだてちやいけねえ、俺は人に拜まれるやうな悪いことをした覚えはねえ、——まあ、落着いて話して見るが宜い」

平次はお靜を願あつで呼ぶと、冷たい水を一杯持つて來させ、それを作松に吞ませて、兎も角も落着かせました。

「親分、願ひ——」

「又拜むのかい爺とつさん、わけも言はずに、いきなり拜まれちや、面喰らつてゐるだけだ。わけを話して見ねえ」

平次と、ガラツ八の八五郎に慰められて、作松は漸く落着いた心持になりました。

そつ訥々とした口調で、何うにか呑み込ませたのは、今日の晝頃から起つた、笛の春日藤左衛門一家に起つた出来事の顛末です。

「——こんなわけでございます、親分さん。禁制の賦とやら、不氣味な笛の音のする最中、私は裏の物置の中を片付けてゐました。笛も済んだやうだから、庭でも掃く心算で、お嬢さんの部屋の前まで来ると——」

「——」
作松はゴクリと固唾を呑みます。無言でその先を促す平次。

「お嬢様は首に繩をつけて、部屋の真ん中に俯向に倒れて居なさるぢやありませんか」

「部屋の真ん中に、俯向だね——仰向ぢやあるまいな」

「間違ひはございません。着物や、髪形がよく似てゐるので、最初は見馴れた私も、妹のあやめさんと間違へたほどですから、玉子を剥いたやうなあやめさんと、瘡瘡で菊石になつたお百合さんとは同じ姉妹でも大變な違ひやうで、仰向になつてゐれば、間違へるやうなことはありません」

「成程」

「疑ひはお内儀の玉江様に掛りました。お百合さんとはたつた十歳とをしか違はない繼母ですから、佐吉親分が一應さう思ふのも無理のないことです。が、お内儀は心掛の立派な方で、そんな淺ましい事をなさるやうな人柄ではございません」

「――」

「それに繼しい仲の――殺されたお百合さんは、ひどい菊石あばたの上に、足も悪く、尼さんあまのやうな淋しい心掛で暮して居る方でしたが、そのお心持の立派なことと申しては――」

作松はツイ涙なみだしげ繁なみだしげくなる様子です。四十男の作松は、長いく奉公の間に、生ひ立ちからの二人の姉妹を見て、きりやうは醜みにくくとも、心掛の美しいお百合に、淡あはいあこがれを持つやうになつてゐたのでせう。

「で？」

平次は又その先を促うながしました。

「佐吉親分は、投げ罍わなを死骸の首に掛けさせて見るやうな、随分イヤな事をさせた上、いきなり私を縛ると言ひ出すぢやありませんか。信州の山奥に居る時は、随分投げ罍も使ひましたが、それはもう二十何年も昔のことで、江戸へ出て人間を害あやめることなどは、夢にも考へちやるません」

「成程、そいつは放つて置いちや氣の毒だ」

平次はツイツイそんな事を言ふのでした。

「有難い、それぢや錢形の親分さん、乗出して下さいますか」

「待つた、そんなに夢中になつちやいけねえ。御用聞にも繩張りがある、下谷竹町は佐吉の繩張りだ、俺はあんなどころまで乗出すわけには行かねえ」

「さう言はずに、親分」

作松は拜んでばかりは居ませんでした。いきなり平次の手を引立てて、力づくでも引張つて行かうとするのです。

「冗談ぢやねえ。そんなつまらねえ事をしたところで、親分はどうにもなるわけはねえ」

ガラツ八の八五郎ツイ立上がりました。

「親分さん、願ひだ。俺はどうなつても構はねえ。が、殺されたお嬢さんのお百合さんは、本當によく出来た方だ。あの敵を討たなくちや、この腹の蟲が癒えねえ」

作松は、平次の手に取りすがつたまゝ、ポロポロと泣くのです。

「よし、それ程に言ふなら行つて見よう。が、下手人は並大抵の人間ぢやあるめえ、どんな人間を縛つたところで、後で怨んぢやならねえ、判つたか」

「それはもう親分さん」

「それからもう一つ、お前に訊いて置くが、娘の部屋の前の裏木戸は、本當に閉つて居たんだね」

「間違ひはありません。先刻私が縛られさうになつて、飛出さうとすると、木戸は内から閉つて居るぢやありませんか」

「そいつは大事なことだ、——八、行つて見ようか」

「親分」

平次の持前の探究心は、佐吉への氣兼ねも忘れて、到頭この事件の眞ん中に飛込ませたのでした。

四

竹町へ着いたのはもう夕刻。肝心の作松が大きな疑ひを背負つたまゝ行方不知になつて、佐吉がカンカンに怒つてゐる最中へ、錢形平次と八五郎をつれて、ノツソリと歸つて來たのです。

「何處へ行つて來やがった、野郎ツ」

飛付く佐吉。

「兄哥あにき待つてくれ、——様子は此男から聞いたが、どうも下手人は外にあるやうだ」

と平次は見兼ねて割つて入りました。

「お、錢形の、兄哥の智慧を借りるほどの事でもないやうだ。人間の首つ玉へ、投げ罫なんか引つ掛ける野郎は、どう考へたつてその男の外にはねエ」

佐吉は憤ぶんく々として作松の物悲しい顔を指すのです。

「さう思ふのも無理はねえが、自分で殺したのなら、わざ／＼罫わなを人様に見せて、疑うたがひを背負しよひ込むやうな馬鹿はあるめえ」

「その野郎は賢い人間だといふのかえ、錢形の」

「賢くはねえだらうが、満更馬鹿でもねえ様子だ。それに兄哥」

平次は一向こだはりのない調子で、其處に固唾かたづを呑む圓陣の顔をひとわたり見やり乍ら、部屋の中に眼を移しました。

「——」

佐吉の憤懣ふんまんは容易なごに和められさうもありませんが、此處でムキになつては、後の不面

目を救ふ由もないことを知つて居るのか、次第に職業的な冷靜さを取戻す様子です。

「ね、兄哥。死骸は仰向あふむけぢやなくて、俯向うつむけになつて居たさうぢやないか」

「ウム」

佐吉は不承々々にうなづきました。

「投げ罫を首に掛けて、遠くから引いて殺したものなら、後ろ向になつて居るところをやられた筈だから、死骸は仰向になつて居なきやならない」

「死骸は俯向になつて居るし、作松は草鞋わらぢを穿はいてゐる」

「ノコノコ部屋に入つて、後ろから絞めて置いて、仰向に轉がしたのはどう考へても作松ぢやねえ」

「身に覺えがあるなら、其處で怒鳴どなつて居るわけもなく、俺のところへ飛んで來る道理もねえ。まア作松は放つて置いて外を搜さがして見ようぢやないか、兄哥」

平次の調子は慇懃いんぎんですが、條理は櫛くしの齒のやうに眞つ直ぐに通つて、佐吉も今は争ふ

餘地もありません。

「すると下手人は？」

「困つたことに、俺にも判らねえよ」

「ハツハツハツ」

平次の言葉の唐突な調子に、佐吉は思はず笑つてしまひました。

佐吉の大笑ひで二人の間の蟠りが取れると、平次は改めて春日家の一人々々に當つて見ました。主人の春日藤左衛門は、

「何んにも心當りはありません。不具ではあつたが、あの娘は心掛の良い娘で、人様に怨まれる筈もなく、こんなことになつては、可哀想でなりません」

そんな事を言ふだけの事です。

「縁談の事とか、聾の話は」

と平次。

「そんな事は耳を塞いで、聴かうともしなかつた娘です。可哀想に、諦めてゐたのでせう」
「それから、話は違ふが、その禁制の曲とやらは、本當に祟るものでせうか」

「さア——、まさかね」

平次の眞面目な態度に引入れられて、春日藤左衛門は本當の事を考へて居たのです。家柄だけに、笛の奇蹟きせきを信じ度いことは山々でせうが、娘一人を殺した相手が、鬼神や魔神の仕業しわざでは、親心が承知しなかつたのです。

「二人の内弟子のうち、どつちが笛がうまいでせう」

平次の問ひはいよく、定じやう石外せきはづれです。

「一色友衛の方が少しうまいでせうが——」

若い時分に道樂強かつたことや、師匠せがれの伴といふ遠慮や、性格的ないろくけつてんの缺點が、春日藤左衛門の心を、武家出の鳩谷小八郎の方へ傾かたむけてゐる様子です。

平次はそれ位にして、内儀の玉江を別室に呼んで見ましたが、この美しい繼母からは何んにも引出せません。お百合ゆりの死んだ驚きと悲しみに顛倒てんたうして、何を訊ねても、世間並の返事しか聽かれなかつたのです。

續いてあやめ、これは大變な收獲でした。

「悪者は、どうかしたら、此私を殺す心算つもりではなかつたでせうか」

姉こはばに似ぬ美しい顔を硬張こはばらせて、そのつづらな眼をしばたゞくのです。

「どうしてそんな事が」

と平次。

「だつて、笛の音のする間、皆んな自分の部屋に居るやうにと言はれたのに、私は、怖い
からお母さんのお部屋へ行つたんです」

「――」

「すると、お母さんはお勝手へ行つて、お部屋にはいらつしやらなかつたから、お歸りを
待つて居たんです」

「――?」

「その間に、姉さんは、私に用事があるかなんかで、私の部屋へ行き、うっかり手間取つ
て居るところを、後ろ姿が似てゐるので、私と間違へて殺されたのではないでせうか。年
は随分違つてゐるけれど、あんまり着物の柄がらが違つては、嫁入前の姉さんに氣の毒だから
と仰しやつて、お母さんのお指圖で、私とお姉さんと似たやうなものを着てゐるんです」
あやめの話は、をしめ處女らしくたどくしいものでした。でも平次は巧みにその話を整理し
ていくと、曲者の意圖いとが何處にあつたかが判るやうな氣がしました。

このすぐれて美しい娘が、事件の原動力になつて、氣狂ひ染みた殺戮さつりくへ、誰かを引込
んで行つたのでせう。この娘の命を狙ふ者は誰？ 平次の眼は、若い二人の男、鳩谷小八

郎と一色友衛しきどしちゑに釘付けになりました。

もう一度、その微妙な消息を春日藤左衛門かすがに訊くと、

「一色友衛にも鳩谷小八郎にも、娘をやると約束した覚えはありません」

とはつきり言ひ切ります。

一色友衛は藤左衛門の昔の朋輩ほうばいの子ですが、放埒はうちつで、弱氣で、笛の腕前は確かでも、娘をやる氣にならず、鳩谷小八郎は、武家の出で腕もよく、男振りもなか／＼立派ですが、人柄に氣に入らないところがあつて、娘の養子にはし度くないと言つた心持が、藤左衛門の言葉の外に溢あふれるのでした。

もう一度あやめに訊くと、これは眞つ赤になつて何にも言はず、母親の玉江は、

「何んと言つてもまだ十九ですから、人柄ひとがらを見抜くことなどは思ひも寄りません」

と謎のやうな事を言ふだけでした。

五

平次は庭に降りて、庭石の配置や、かなり深い植込みの様子や、裏木戸の具合を調べて

見ました。

作松が言つたやうに、裏木戸は内から輪鍵わかぎが掛つて居りますが、釘はさしてゐず、その下のあたりはよく踏み堅かためられて、變つた足跡などを付けられさうもありません。

引返して一色友衛を捜さがすと、何時の間にやら稽古場けいこばに引込んで、春日藤左衛門が置き忘れたままの『禁制の祕曲』の前に、愛管あいくわんに息を入れて、一生懸命工夫をして居ります。斯かう音を立てずに吹いてゐても、その道の者には、曲の感じが判るのでせう。

「それが禁制の賦ふとやらで？」

平次は靜かに近づきました。

「え」

一色友衛の振り返つた眼には、藝術的陶醉たうすゐともで言ふのでせうか、夢見るやうなものがありません。

「それを吹くと人が死ぬほどの祟たりがあると云ふのでせう」

「私は、そんな事を本當には出来ません。この曲は、少し變つては居るけれど、『寝取り』には違ひないのでよ」

寝取りとはどんなものか、それさへ平次には解りません。

「ところで一色さん、死んだお百合さんは、どんなお嬢さんでした？」

「申分のない人でした。優しく、慈悲深く、お氣の毒な——」

「妹のあやめさんは？」

「あの人は綺麗でせう、あんなお嬢さんは滅多にありませんね」

一色友衛の眼は藝術的な陶醉からさめて、現實の世界のあこがれに活々と輝きます。

平次はそれ以上に追及する題目も無かつたのでせう。一色友衛と別れて、今度はあやめと廊下で立話をしてゐる鳩谷小八郎を見付けて、人の居ないとところに誘ひました。

「鳩谷さんは御武家の出ださうですね」

「三男ではどうにもならない、——笛でも稽古しなきや」

少し捨鉢な調子です。

「死んだお百合さんはどんなお嬢さんでした」

「良い人だつた、あんな人は滅多にないな」

「妹のあやめさんは？」

「さア」

小八郎は含蓄の深い笑ひを残して、平次の思惑に構はず、サツと向うへ行つてしま

ひました。

「親分、下手人の當りはつきましたか」

ガラツ八は心配さうな顔を出しました。平次の動きを、不愉快な顔で見守つてゐる、佐吉の態度に、少しばかりムシヤクシヤしてゐる様子です。

「解つても縛るわけに行かないよ」

「へエ——」

「餘つ程巧んだ仕事だ。こんな恐ろしい人間を、俺はまだ見たこともない——」

平次は何となく萎れ返つて居ります。

「男ですかい、女ですかい」

「それがね」

「驚いたね」

ガラツ八は恐ろしく酔っぱい顔をして見せるのでした。

「解つてゐるぢやないか、八兄哥」

佐吉は苦り切つた顔を持つて來ます。

「佐吉兄哥、——俺も解つた心算だが、どうも腑に落ちないことがある。一と晩よく考へ

て、明日の巳刻過ぎに、又此處で逢ふことにしようか」

平次は變なことを言ひ出しました。

「そんな手數のかゝる事をしなくたつて、下手人の匂ひのするのを擧げたら宜いぢやないか」

と佐吉。

「それがいけない」

「作松でなきや、繼母の玉江さ、——下女と一緒に勝手に居たつて言ふが、あの下女だつて一と役買つてゐるかも知れねえ」

「まア、待つてくれ、佐吉兄哥。下手人はどうせ逃げつこはねえ、何事も明日のことだ」
平次は何か考へたことのある様子で、サツサと引揚げましたが、一二町行くと小戻りして、主人の春日藤左衛門を呼出し、門口で何やら念入りな注意を與へる様子でした。

それから眞つ直ぐに神田へ——。

「八、これから一と晩かゝる心算で、一色友衛と鳩谷小八郎の身許を洗つてくれ。親兄弟のことも出来るだけ詮索するんだよ」

「そんな事ならわけはねえ」

「それから、下ツ引を狩出して、あの家の通夜つやにやつてくれ。一人へ一人づつ見張りをつけるやうにするんだ、判つたか」

「へエ——」

「油断をすると恐ろしい事になるぞ」

何が何やら解りませんので、八五郎は面喰らつて飛出しました。平次の言ひ付けたことを、忠實過ぎるほど忠實にやり遂げるのが此男の取柄とりえです。

六

翌る日、平次と八五郎と佐吉が、竹町の春日家に顔を揃へたのは、巳刻よつはん半少し過ぎでした。

平次の警戒を裏切つて、無事な一と晩が明けると、春日家の空気もさすがに、いくらか冷靜さを取戻した様子です。

「少し解りかけた事があります。面倒でも、もう一度きのふ昨日の事をやつて下さい」
平次は變なことを言ひ出しました。

「昨日の通りと言ふと？」

驚いたのは春日藤左衛門でした。

「皆んな昨日の晝の通りに、——お勝手にはお内儀と下女、お嬢さんは親御さんの部屋に、鳩谷さんは御自分の部屋、作松は物置、——御主人と一色さんは稽古部屋、そして昨日と同じやうに、上野の午刻こゝのつが鳴つたら、禁制きんせいの賦ふを吹くのです」

「そんな事が——」

あまりの事に、春日藤左衛門はさすがに尻しつごみしました。

「いや、これをやらなきや、お嬢さんを殺した下手人は解りませんよ。さア、もう正午こゝのつに近い、銘々の部屋に入つて下さい」

平次は假借かしやくしません。八五郎に手傳はせて押込むやうにそれ／＼の部署に就つかせると、家の中は暫く、死の寂寞せきぼくが領しました。

シーンとした、眞晝の淋しさ。

やがて上野の正子刻こゝのつの鐘が鳴ると、奥の稽古部屋から、不氣味な笛の音が、明る過ぎるほど明るい眞晝の大氣に響いて、地獄よみの音楽のやうに聞えて來るのです。

やゝ暫くすると、裏木戸は、外から靜かに開きました。輪鍵わかぎがかゝつて居なかつたので

せう。と、木戸を押ししてそつと入つて來た怪しの者が一人、蹺音あしおとも立てずに部屋の外へ忍び寄ると、戸袋の蔭かげから、スルリと縁側に滑り込みました。

見ると、疊の上を膝で歩いてゐるのです。

部屋の中には、後ろ向になつた女が一人。怪しい者の手から、それを目がけてサツと繩が伸びました。と、女と見たのはクルリと振り返つて、投げかけた繩の下をくぐると、曲者の身體に素晴らしい體當りをくれました。錢形平次です。

「わツ」

逃げ出す曲者。

「御用ツ」

羽織はおつた女の單衣ひとへをかなぐり捨てると、平次は曲者の利腕きこうでを取つて、縁側にねぢ伏せたのです。

「親分」

飛んで來たのはガラツ八と佐吉。

平次は曲者の始末を二人に任せて、靜かに庭へ飛降りた時、奥から、勝手から、藤左衛門と二人の弟子と女達は、一ぺんに飛込んで來ました。

「この通り、皆んなの氣のつかないやうに、裏木戸を閉める隙はある」

平次はその間に裏木戸の輪鍵わかぎをかけて、元の縁側へ歸つて來たのです。

ガラツ八と佐吉が滅茶々めっちゃ／＼に縛り上げた曲者を見ると、下谷から淺草の界限かいわいを、物貰ひをして歩く馬鹿の馬吉といふ達者な三十男。

「あれ、何をするんだよ。俺は何にも悪いことをしねえよ」

檻樓ぼろだらけの装束しやうぞくをゆすぶり乍ら、大聲にわめき散らすのでした。

「馬吉、——飛んでもねえ野郎だ。何だつてこんな所へ入つて來たんだ」

平次は靜かに訊きました。

「一貫の大仕事だよ、一貫ありやお前何だつて食へるぢやないか」

「その錢をくれたのは誰だ」

佐吉は少しあせります。

「知らねえよ、言つちやならねえことになつて居るんだ」

「よしく、お前は良い男だ。俺が二貫やるから、その錢をくれたのは誰だか言つてくれ」

平次は餌を抛つたのです。

「二貫？　嘘うそだらう」

「嘘ぢやない、ほら此通り」

平次は一と掴つかの錢と小粒こまを交ませて馬吉の膝小僧の下ならに竝ならべたのです。額は二分以上あつたでせうが、馬鹿に取つては、一貫の上は二貫でなければなりません。

「やア、随分あるな。それだけありや、馬だつて殺してやるぜ、——錢をくれた人かい、顔は判らなかつたよ。この暑いのに、頭づきん巾かぶを冠かぶつた侍だつたよ」

さう言ふうちにも、馬鹿の目は、好ましさうに一と掴つかみの錢の山を眺めるのでした。

「皆さんに聽いて貰ひ度いことがあります。稽古部屋へ集つて下さい、——馬鹿の馬吉は、そのまゝ物置へ抛なり込こんで置けば、錢を眺めて遊んで居ますよ」

平次は春日家の人達を、下女のお篠しのから下男しもの作松まで、奥の稽古部屋に入れました。

「親分、馬吉けしかを噓うそけたのは誰でせう」

春日藤左衛門はさすがに氣が氣でない様子です。

「今に判りますよ、——これで皆んなかしら、——いや頭數なんか數へるまでもない、——そこで、馬鹿の馬吉を使つてお嬢さんを殺した曲者は誰か、これから考へて見ませう」
これから考へる——といふ悠いうちやう長ながな言葉に、藤左衛門は眉まゆをひそめました。

「曲者は、——びつくりしちやいけませんよ、實は、妹のあやめさんを殺す氣だつた。馬

鹿の馬吉を手なづけ、膝で歩くことや、縄で締めることまで仕込んで、あの日裏木戸から植込の蔭へ誘ひ入れて隠した」

「――」

「馬吉には、上野の正午が鳴つて、奥で笛の音がしたら、そつとお嬢さんの部屋へ入つて、害めるやうに教へて置いた。笛の音と一緒にやるのは、その時刻には、皆んな銘々の部屋に入つて、怖々、時の經つのを待つてゐるから、あの部屋のあたりには人目が無い上に、自分は何の關係も無いことを他の人に見せ付けて置くことが出来る。それから、何も彼も禁制の賦の崇と思はせることも出来るかも知れず、それがいけなければ、平常投げ罘の自慢をして居る、作松に罪を被せることが出来る」

平次の説明の恐ろしさに、思はず一同は顔を見合せました。

「それは誰だ。親分、言つて下さい。その娘の命を狙つたのは誰だ」

春日藤左衛門はたまり兼ねて、平次の方ににじり寄りました。娘の敵が判つたら、即座にも斬つてかゝる心算でせう。

「あれ、――あれが下人ですよ」

平次は耳をすまして、遠く物置の方を指しました。

「御用ツ、御用だツ。野郎ツ」

八五郎の叱咤と、刃と十手の相搏つ音が、明るい眞晝の空氣に、ジーンと響きます。平次を先頭に皆んな飛んで行きました。物置の前では、八五郎に組み敷かれた一人の曲者、まだ精一杯に争ひ續けて居ります。

「あツ、友衛」

藤左衛門も、玉江も、あやめも色を失いました。その曲者といふのは、禁制の祕曲を、あんなにせがんだ、——猫の子のやうに弱々しい、あの一色友衛の、取亂した凄まじい姿だつたのです。

「此野郎が、馬鹿の馬吉を、後からヒ首で刺さうとしましたよ」

ガラツ八の威勢のよさ。

「そんな事だらうと思つたよ、恐しく悪智慧の廻る野郎だ」

平次はガラツ八に手を貸して、一色友衛を縛り上げます。

「親分、これが曲者？ あの娘を殺したのがこの男でしたか」

藤左衛門はよろ／＼と崩折れて、鳩谷小八郎に援けられました。

「一色家の何も彼も、——格式も、藝も、皆んな春日家のお前さんに奪られたと思ひ込ん

で居るのですよ。根性の曲つた人間の考へることは、まともな人間には判らない」
不意に縛られた友衛は立上がりしました。

「そればかりぢやない、あやめまでこの俺を踏付けやがつた——賣女」

「あれエ——」

物凄い呪の叱咤を浴びて、あやめは暴風の前の草花のやうに大地に崩折れました。

「八、向うへつれて行け」

平次は八五郎に目配せして、必死と狂ふ一色友衛を遙かの方に違ぎけ乍ら續けました。

「皆んなあの男のひがみだ。が、内弟子も、外弟子も、あんな綺麗な娘を勘定に入れずに、藝事にばかり打込んで残ると思ふのも間違ひだ。——人間は人間が考へるよりは弱い。早く聳を決めることですね」

平次はさう言ひ捨てて、八五郎の後を追ひます。何時もの人を縛つた後口の悪さを舐めて居るのでせう。

馬鹿の馬吉は、物置の中で何時までも錢の勘定をして居りました。手にをへない夥しい寶に陶酔した顔を擧げて、時々ニヤリニヤリとするのを、手柄をフイにした佐吉は忌々しく睨め付けて居ります。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十六巻 笑ひ茸」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年7月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

禁制の賦

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>